



### ◎旧本田家住宅の発掘調査 シリーズ第1回

国立市は東京都の真ん中、多摩川の北側に広がる武蔵野台地の南端に位置しており、これまで旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世の遺跡が29か所で発見されていました。

令和4年度に国立市の30番目の遺跡となったのが、旧本田家住宅主屋・表門を含む敷地を範囲とする「本田家住宅跡」です。現在、国立市が進めている江戸時代から現代にかけて本田家の当主が居住した古民家、旧本田家住宅の解体・復原プロジェクトが、この遺跡を発見するきっかけとなりました。

本田家は、家伝に江戸時代前期には谷保に移住したと記され、馬医や医者、書家などを家業とし、谷保の地主・名主として村社会を支えました。なお、当主の日記には、新選組で知られる土方歳三（土方家とは姻戚関係）や近藤勇との交流に関する記述がみられます。多摩地域の自由民権運動に携わり、国立大学町開発に貢献した当主らが、江戸時代から現代にかけて居住していたのが旧本田家住宅（東京都指定有形文化財）です。旧本田家住宅は主屋内で発見された享保16（1731）年と書かれた祈禱札によってそれ以前に建てられたと考えられていますが、創建年代はまだ分かっていません。復原工事を行うにあたり、この住宅が建てられた江戸時代の当初から現在までの変遷を明らかにする目的で、令和4・5年度にかけて建築部材の調査や地面の下の痕跡を対象とした発掘調査を行っています。

旧本田家住宅主屋の床下からは、創建当初から今日まで柱が立っていたと考えられる礎石や、床などを支える部材に伴う束石、本田家に残された記録にはない半地下式の空間とカマド（図2）、レンガで作られた炉、出産時に胎児を包んでいた膜や胎盤などを納めた胞衣皿や（図3）、徳利や七輪を埋納したと思われる遺構などが発見されました。また、食器やすり鉢、各種容器、硯、煙管、銭貨（寛永通宝・文久永宝）など、江戸時代から現代の習俗や生活に関わる遺物が多数出土しています。なお、創建当初と考えられる建築部材や礎石には、番付や柱の圧痕などが認められました（図4）。今後、

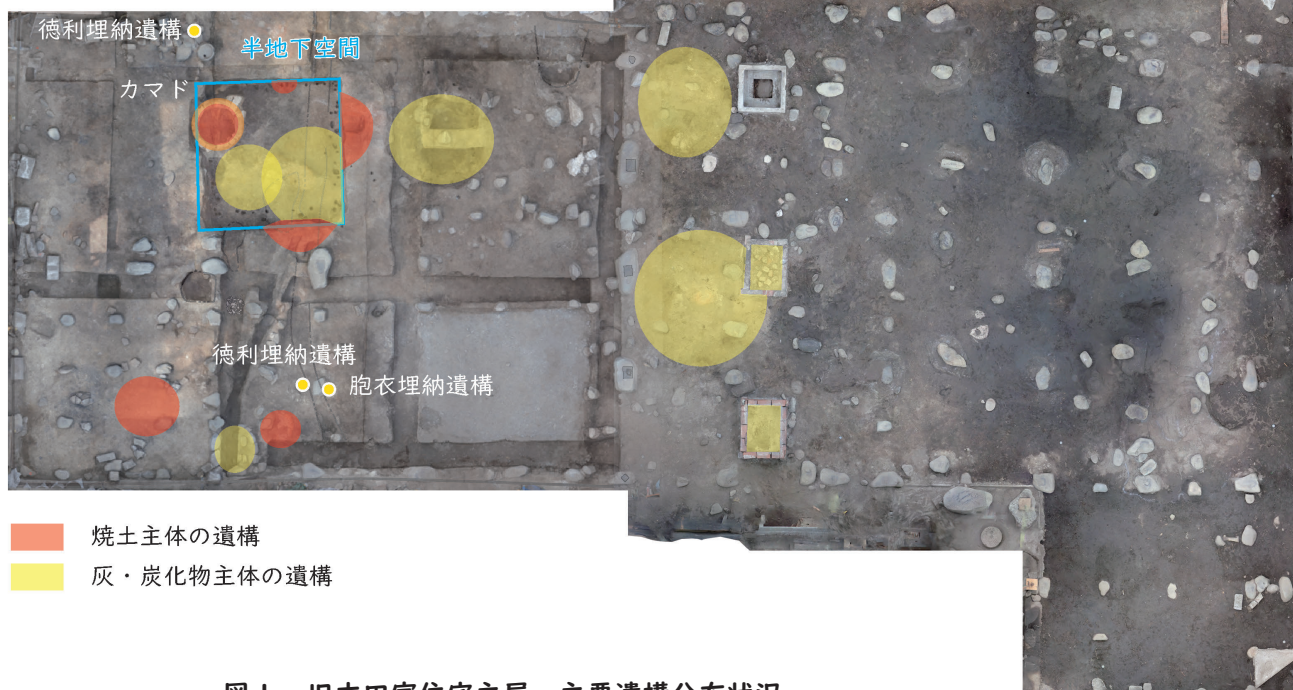


図1 旧本田家住宅主屋 主要遺構分布状況



図2 半地下空間とカマド・炉の痕跡



図3 えな 胞衣埋納遺構



図4 礎石に墨書された番付（右）  
芯墨と柱の圧痕（左）

このような新たな手掛かりを加えた検討を進め、建物や文献資料のみでは見えてこなかった歴史を明らかにしたいと考えています。

旧本田家住宅は、谷保の歴史に関する膨大な資料が建物や敷地と共に国立市に寄贈されたものです。本田家が守り伝えてきた、江戸時代から現代に続くモノや記録は、地域社会や人々の継続的な記録として歴史的・文化的価値が高く、また希少な資料群として評価されています。

これまで十数年におよぶ旧蔵資料の悉皆調査を進めてきましたが、建物の解体調査、そして今回の発掘調査の成果を合わせた総合的な研究がこれから始まります。現代のくにたちの地に奇跡的に残された、江戸時代から現代にいたる歴史を内包する旧本田家住宅を地域の文化資源として保存し、その歴史と人々の思いを復元する試みを続け、未来へ伝えていきたいと思ひます。

（生涯学習課社会教育・文化芸術係 清水 香）

発行：国立市教育委員会 生涯学習課 社会教育・文化芸術係（市役所3階45番窓口）

☎042-576-2111（内線：323）メール：sec\_shogaigakushu@city.kunitachi.lg.jp